

(5) 令和2年度事業計画の達成度

ア 令和2年度基本方針に関して

(ア) 「介護の質の向上」について

前年度以前からの継続テーマである、「基本理念の理解、共有」、「個別ケアの質的向上」、「職員の達成感獲得への支援」、「情報共有の充実」については、令和2年度においても施設運営の中で最も重要な課題と位置づけ、勉強会や現場指導を通じて取り組みを続けた。

令和元年度からの新規課題「ノーリフティングケアの導入」について、令和2年度は、「福岡県ノーリフティングケア普及促進事業」のモデル施設となり、積極的に導入に取り組んだ。具体的には、「ノーリフティングケア委員会」を新設し、委員を中心に、ノーリフティングケアの意義の浸透、アセスメント・プランニングの流れの構築、床走行式リフトや入浴用リフトなどの福祉用具の導入などを行った。次年度もモデル施設としての活動は継続となるので、取り組みを続けていきたい。

(イ) 「家族対応の充実」について

新型コロナウイルス感染症対策で、面会を中止したり、再開しても回数、時間、場所などを制限していたため、家族との接触は激しく減少した。直接会う機会が減っても、家族と利用者、家族と職員の良好な関係を維持するため、定期的な電話や、SNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）を用いての連絡などの状況報告に力を入れた。

(ウ) 食事サービスの充実

利用者の状態や嗜好にきめ細かく合わせた食事の提供は継続している。

季節に合わせた行事食の提供は、給食職員不足により現在中断しているが、月に数回、生果物を提供することで、季節感を味わっていただけるようにした。

(エ) 管理体制の充実

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策が一番の課題だったが、「平時のマニュアル」、「発生時のマニュアル」などのマニュアルを整備し、必要に応じて改正も続けた。

施設の中・長期的な老朽化対策の作成はできなかつたので、今後も取り組みを続ける。

(オ) 経営の効率化

各サービスの稼働率は後述のとおり低調であった。

(カ) 施設からの情報発信

HP（ホームページ）やSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）を通じて、施設の考え方、日常の風景などの発信を継続した。

イ 令和2年度事業内容に関して

(ア) 特別養護老人ホーム

a 年間利用者数について

1日平均在籍者数目標を138名、1日平均在所者数（外泊等を除く数）目標を135名に設定していたが、実際には、1日平均在籍者135.7名、1日平均在所者131.2名と低迷した。

低迷の理由は、主に退所者の増加（令和元年度22人が令和2年度35人）にあるのではないかと考えている。その中でも特に急性期病院に入院後2週間程度で療養型病院に転院し、そのまま長期入院となるケースが前年度に比べ9名増加している。今後、医療的ニーズの高い利用者を受け入れる体制の確保を進めていく必要があると考えている。

b 事業内容について

新型コロナウイルス感染症対策を求められる1年であったが、早い時期に体制の整備を行うことができ、また感染者もいなかったため、大きな混乱はなかった。

新型コロナウイルス感染症対策として他部署の職員間の交流を制限したため、職員全体が集まる研修等が行えなかったが、部署ごとの研修や日常的な指導はできたので、理念の浸透、アセスメント力の強化などに取り組むことはできた。

(イ) ショートステイ

a 年間利用者数について

平均利用者数7.5名、稼働率75%を目標値に対し、年間平均利用者数6.2名、稼働率62%と低迷した。

新型コロナウイルス感染症の影響で、利用を控える方がおられたり、長期継続利用者の特養入所が続いたことが原因と考えている。

利用控えの傾向はもうしばらく続くと思われるが、反面、新規受け入れを中止している他事業所もあるので、新型コロナウイルス感染症対策を十分にとった上で積極的に新規利用者を受け入れることで稼働率の回復に取り組んでいる。

b 事業内容について

利用者についての情報収集と、職員間の情報の共有に努めることで、利用者・家族の信頼を得ることができ、リピーターの利用者を増やすことはできている。

令和2年度は、ノーリフティングケア導入にあたり、利用者の残存能力のアセスメントや介助方法の細かい見直しに力を入れた。

認知症や身体拘束・虐待についての研修に特に力を入れた。

「楽しみ」の面においては、新型コロナウイルス感染症対策のため外出レクはできなかったが、密にならないよう気を付けながら、毎月の体操や飾り物の製作などは継続して行った。